

## 2016年度教師海外研修(エチオピア) 研修報告書

学校名	名古屋市立守山東中学校	氏名	佐藤 仁美
-----	-------------	----	-------

### <印象に残る写真2点>

#### ●写真1 [1168]

インジェラが焼きあがるまで

インジェラが焼きあがるのを待つ間、ガネットさんと恋愛話ですごく盛り上がったり、エチオピアでまだ残っている慣習の話を教えてもらったり…。やっぱりみんな、盛り上がる内容は一緒なのね😊笑



#### ●写真2 [1389]

失敗しても笑顔！

ホテルへの帰り道。コーヒーの豆挽きをしている女性を発見！体験させてもらうも、難しくて豆がこぼれちゃった…しまった！と思って女性を見たら、満面の笑顔😊私も思わず笑顔になりました。ありがとう！



### 1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

#### (特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

私の現地研修の目的は2つあった。1つ目は、エチオピアのいいところと日本との共通点をたくさん見つけてくること。2つ目は、国際協力の現場を直接見て学び、価値観を広げることであった。実際に現地の人々と話をする中で、年配者を敬う文化など日本との共通点が思っていた以上にたくさん見つかった。こちらが心を開いて話をすれば、向こうもすぐに心を開いてくれたことが嬉しかった。また、青年海外協力隊や専門家の方々と交流をする機会が多くあり、本当に必要な支援とは何かについて、何度も考え、現場で働く方々と意見交換ができたことは素晴らしい経験になった。日本の子どもたちには、国・人種・宗教などが違っていても、みん

な同じ人間で、お互いに尊重し合い助け合う必要があることを伝えていきたい。また、メディアからの情報だけに惑わされず、自分の目で見ようとしたり、調べ考えたりする力を育てられるような授業をしていきたいと思う。

## 2. 訪問国から学んだこと（気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど）

### （1）柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

この研修で、エチオピア人は正直で優しい人が多い、教育が大切だと思っている人が多い、自分の国や文化を好きな人が多い、自分は幸せだと思っている人が多い、治安が良いなど、エチオピアのいいところがたくさん見つかった。また、エチオピアでは、家族やお客さんと一緒に食事をするときは、相手の好きな具をインジェラに巻き、手で食べさせるグルシャという食べ物に分け合う文化があり、素敵だなと思った。

エチオピアの小学校の就学率は93%（女子でも90%）と、意外と高いことに驚いた。これはアフリカの他の国の平均よりも高い数値だ。しかし、そのうち60%の子どもたちは、小学校を卒業するまでに中退してしまい、中学校の就学率はたったの39%と、エチオピアの教育の課題も分かった。エチオピアの子どもたちはいろんな背景を抱えているが、私たちが学校に訪問したときは、歌や声援でもてなし、愛らしい笑顔で温かく迎えてくれたので、子どもたちの生きるエネルギーを感じた。

### （2）柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

エチオピアには、日本と同様、おもてなしの文化や年配者を敬う文化があり、国民は誠実でシャイな人が多く、控え目で遠回しに物事を言うところなど、意外と共通点がたくさんあった。恋愛の話がとても盛り上がる場所など、共通点を発見する度に、エチオピアという国が一気に身近に感じられた。

支援には様々な形があるのだということも学んだ。例えば、道路や電車などのインフラ整備など成果が形となって見えやすい支援と、村落に溶け込んだ技術協力や教育支援など成果が見えにくい支援。どちらの方が正しいということはなく、どちらのやり方も必要だと感じた。また、その際に、相手と対等な立場で話し、相手のニーズに応えることがとても大切だということがわかった。また、支援終了後に、自立につながるのか、10年後や20年後のこともよく考えてから支援内容を決めることが重要だと学んだ。

### （3）柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

共通の課題として特に印象に残ったのは、女性の社会進出の低さと、男尊女卑の考え方がまだある点である。エチオピアの特に田舎では、女の子は早くに結婚をしてしまうので、中学校や高校に通うことができず、社会進出の可能性が狭まってしまうようだ。また、結婚したら炊事洗濯などの家事全般は全て女性の仕事である。一方日本は、共働きが増えたとはいえ、管理職に就く女性の数は未だ低く、育児や家事は女性がすることが当たり前だという感覚が根強いように感じる。現地の NGO スタッフのアシャナフィさんから、最近では“Women's Empowerment”ではなく、“Family Empowerment”という言葉を使い、家族みんなで一緒にこの問題に取り組んでいると聞いた。家族全員が働きやすく、生きやすい環境作りをすることが、国の更なる発展に必要なと思った。また、日本もエチオピアも、食料を始め、様々なものを輸入して成り立っている国である。困ったときはお互いさまで、お互いに助け合うべきだと強く感じた。

## 3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

この研修の「良い!と思ったところ」は、国際協力の現場を間近で見ることができ、また、青年海外協力隊や専門家の方々と交流や意見交換をする機会が多くあったこと。短期間でこんなにも多くの方々に出会えることは、滅多にないと思う。「今後あるといいなと思う視点」は、なかなか難しいとは思いますが、一般庶民の人々の暮らしに触れる機会がもっとたくさんあったらいいなと思う。エチオピアチームも1日でもいいから、ホーム

ステイができれば最高だったな、と思う。

#### 4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

##### ② 青年海外協力隊（理科教育）活動+ Temenjazyhe Primary School 訪問（子どもとの交流）

【木下／佐藤】

Temenjazyhe Primary School の生徒数は、1クラス約50人。名古屋市では最大40人までと決められているが、エチオピアでは、最低45人と決められており、最大数の制限はないということに驚いた。青年海外協力隊の方々には、物資が不足している中、身近にあるもので道具を代用したり、現地の先生方と実験のワークショップを行ったりして、生徒が理科の実験を行えるように日々工夫されていることが分かった。

生徒たちに、学校が好きか、夢はあるか、今幸せかなど、様々な質問を投げかけたが、どの生徒も「Yes!」と自信満々に手を挙げて、自分の思いを熱く語ってくれたことに感動した。学校を好きな理由としては、学ぶことや新しい知識を得ることが好きだという意見があった。将来の夢は、パイロットや医者が多く、エンジニアや科学者、建築家になりたいという子もいて、理系の夢が多いなと思った。幸せと感じるときは、何か新しいことを学んでいるときや友達とサッカーをしているときと答えてくれた。私が同じ質問を受けたら、堂々と「Yes!」と言えるだろうか、幸せって何だろう、そんなことを考えるきっかけになった。（佐藤仁美）

##### ④ JICA エチオピア事務所関係者との懇親会（8/8と8/15 シャクラディブス）【佐藤／松田】

懇親会では、おいしくて安い地元のビールを飲みながら、昼間とはまた違った雰囲気の中で、JICA 職員や青年海外協力隊の方々には、普段の生活や人生について貴重なお話をたくさんしていただいた。JICA 事務所次長の田中宏幸さんが「エチオピアは日本から遠い国だけど、来てみると日本と同じように家族や年長者を大切に敬ったり、人のことを考えたり、意外と普通。エチオピア人も日本人もみんな一緒だ。」と語ってくださったのが特に印象に残っている。青年海外協力隊の方々も、現地の人たちと同じ言語で話し、同じ物を食べ、共に笑ったり、悩んだり、助け合ったり、課題に立ち向かったりしている姿を目の当たりにして、おもしろそうだな、私もいつか参加したいと強く思った。また、JICA 職員の方々には、家族ぐるみでの付き合いがあり、職員の子どもが、まるでみんなの子どもかのように大切にされている姿を見て、温かくていいなと思った。（佐藤仁美）

##### ⑨ 付加価値型森林コーヒー生産・販売促進プロジェクト（森林コーヒー農園、サディ村協同組合）

【木下／佐藤】

森林コーヒー生産とは、自然のまま無農薬で育ったコーヒーの実に、付加価値をつけて売り出す方法である。こうすることで、農家の人たちに支払われるお金が増え、環境保全にも役立つという。原生林をしばらく歩いて、森林コーヒーの木々にたどり着いた。森林コーヒーの木は3mと高く、木を曲げて1粒ずつ手摘みをし、それを天日干してから脱穀する。歩きながら森林コーヒーの実を食べさせていただいたが、とても甘く、エチオピアコーヒーはフルーツのような風味があるとよく聞くのも納得した。

サディ村の農家の方々によると、JICA の活動により、効率的な生産ができ、収入が増え、生活が向上したという。教育、本、服、更には携帯電話やインターネットなどにもお金をかけられるようになった。学校に行く子どもは、昔は村の50%程度だったが、今は95%ほどだという。「子どもに教育を受けさせたことにより、収入が増えた。」「教育は自立のために必要で、教育を受けさせて良かった。」という話を聞いて、教育の重要性を改めて感じた。（佐藤仁美）

##### ⑰ JICA エチオピア事務所報告会【佐藤／松田】

研修を通して、エチオピアで学んだこと、日本に帰ってからどうしたいかについて、参加者全員がそれぞれ

の思いを熱く語った。後半は「幸せとは何か?」「なぜ日本は幸福度が低いデータがあるのか?」について話し合った。周囲の目を気にしてしまう、今を生きるのではなく未来の貯蓄のために生きている、いつも何かを追われている、そもそも幸せの定義は人それぞれだ、考えれば考えるほど分からなくなる、と色々な意見が出た。JICA 事務所所長の神公明さんの定義は、自分の居場所があることと自分のものさしがあること。この2つがあれば、困ったときも自分がちゃんと生きていると感じられるのではないかと、その言葉を聞き、そういう考え方もあるのだと心に響いた。

ワークショップやバスの移動中など、様々な場面で多くのことを話し合い、共有してきた。この報告会を通して、素の自分を出し、お互いを尊重し合える、こんなメンバーと共に学び合えたことを、私は幸せに感じた。  
(佐藤仁美)

## 5. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

ビデオ撮影について。現地で出会った方々、協力隊や専門家の方々が、いろんなタイミングで貴重なお話をさせていただきます。バッテリーのこともあるので、みんなが落ち着いた場所でメモを取れる状況なら、ビデオを回さなくてもいいかもしれませんが、歩きながらの説明などでは、できるだけビデオを撮っておくと、帰国後に役立つと思います。

体調不良について。無理せずに仲間に伝えることが大切だと思います。私は疲れなのか水なのか、上からも下からも出てしまいましたが、水分補給をしっかりとしながら落ち着いて出せるだけ出すことで早く回復したと思います。非常食用にと日本から SOYJOY を持って行きましたが、胃に優しく、ホッとして元気が出たので、日本食は少しでいいからあると安心だと思います。

## 6. その他全般を通じての感想・意見など

今回は、このような貴重な経験をさせていただき、本当にありがとうございました。アフリカの大地を踏むのが私の小さい頃からの夢でした。12日間という短い期間でしたが、それを忘れてしまうほど、この研修は中身が濃く充実していて、何より、この研修で素晴らしい仲間と共に考え、学び合えたことが一生の宝になりました。今まで単独でインドに行ったことがありましたが、仲間との学び合いでこんなにも物の見方や考え方を増やせるのだと、毎日楽しかったです。私も国際協力の現場で働きたい！現地で考え思ったことを忘れずに、心が折れそうなきときはあのビデオを見て、がんばります。

久世さん、チャッキー、私たちの担任の先生になってくださって、本当にありがとうございました！最高の研修になりました！！

以上